



その後

前回のエッセイでも書かせていただきましたが、ここ数年、劇場外での演劇やダンス、サイトスペシフィックの公演に頻繁に関わるようになってきてから、建築、環境、空間照明の要素をどのようにして、舞台芸術に取り入れていけるかを模索し、今後の舞台照明デザインの幅と可能性を広げていくことを目的に、スウェーデンの大学院に行くことを志したと、綴らせていただきました。そのような、サイトスペシフィックタイプの公演が、英国だけではなく、日本でも増えてきているし、照明デザインの柔軟性が求められてきていると強く思います。

結局、文化庁の新進芸術家海外研修制度や、スカンジナビア助成金は受からず、その上、大学入試の申込み書類が不十分（提出日前に全て提出したはずなのに、「日本の学歴証も提出してください」という連絡が締め切り後にきて、それも提出したにも関わらず、タイムオーバー）という事で、審査対象の枠に入れてもらえなかったのは、とても残念です。ひどく意気消沈している間、いろいろと悩みました。

心の声：新しい角度から照明と向き合い、今後の自分のデザインの幅を広げたい。将来的に、日本でも活動の場を広げていきたいけど、今このまま日本に戻っても、おそらくデザインのお仕事はいきなりさせてもらえないだろう（ケーブルを5～10年巻いたら、ようやくアシスタントデザインをさせてもらえるか、くらいシビアな印象が、日本にはある。あくまで

も印象だが）。そう甘くないのは重々承知。とはいえ、英国で、今までのように小中（たまに大）スケールの劇場でデザインの仕事を続けても、新たな試みや大胆な実験ができる環境は、なかなか巡ってこないし、それを自ら実行しようとしても、時間と経費がかかるゆえ、なかなか公演で実現することが難しい。とてもわがままな悩みだと思われるかもしれないが、このままではすっきりしない自分がいる。今、人生の折り返し地点に来ていると感じている。新たな環境に自分を放り込んで、視野を広げながら成長し、可能性を切り開いてみたいという大志を抱いてもバチは当たらないだろう。失うものは何もないし、今しかない！今までやってきた事を捨てるのではなく、それを最大限に活かして、新たな創造がしたい。何事もやってみないとわからないし、新しい事に挑戦するというのは、それなりの犠牲と覚悟がいる。学校がダメなら、きっと初めから行くべきではなかったのだろう。いっそうのこと、新しい世界に一度飛び込んで、仕事をしながら照明を新たな視点で見つめ直し、技術と知識、感受性を養うのもありかもしれない？！よし、転職しよう！！お師匠様、ごめんなさい！きっと、数年後に舞台へ帰って来ます。（数ヶ月だったりして?!）

目指すは、ずっと舞台照明に取り入れたいと思っていた、照明アートと野外・空間照明の演出・デザインができる職場。ということで、見つけた建築・環境・空間照明デザインの会社に6月から就職することになりました！本社はロンドンで

すが、東京にもいづれ、スタジオを開くそうなので、東京でも働ける可能性がありそうです。期待が膨らみます♡

舞台照明は特別でありたい。特別であるからこそ、非現実～異次元の世界に観客を招き入れることができる。観客を招き入れる為に、セリフはもちろん、音響や照明、舞台美術の全てがその要素を作り出す。私たちにとって、それはとても当たり前のことであるが、箱（劇場）の外でのことは関係ないと思っている人が多い。箱の周りのコミュニティーはどうだろう？どこからどこまでが、舞台芸術で、どこからが舞台芸術外なのか。公演と呼べないものは、舞台芸術ではないのか。それは、演出家や我々デザイナー、そして観客が決めることであって、お役所さんが決めることではありません（と文化庁に言いたいです）。そもそも、その境界線にこだわる必要はないのだと、気付きました。

先月、日本に帰国中、維新派の松本雄吉氏の追悼イベントに出席したときに、そのようなことが頭に浮かんできました。対談で聞いたのは、維新派の野外公演の大変さや人間模様、型破りのゲリラ・インスタレーションでの警察との衝突など。昭和っぽいなあと感じながら、人間らしい生々しさに満ち溢れた制作過程と葛藤が、思い浮かばれ、なんだか心がほっこりしました。私が先ほど話していた、アート～環境～コミュニティー～空間照明と、繋がるものがそこにある気がしました。美しい野外風景に溶け込んだ維新派の作り上げた舞台は、圧倒的な土地的印象を観客に与えます。その地の、その風景の中でしか成り立たない舞台芸術の姿がそこにあり、土地の歴史と人々の営みが、彼の作品の主材料だったのではないかと感じます。ある場所に訪れるという人間の行動に、様々な理由（物語）があって、そこで感情が生まれてくると思うと、広く考えてみたら、その行動自体が人生の舞台台なのではないでしょうか。

舞台照明は儂いから美しい。みんなの鼓動が一体となる、限られた時間と場所。そこにいられた自分は、本当に幸せ者です。その美しさを噛み締めながらも、今後は新たな照明の可能性を追求していきたいと思います。



維新派『アマハラ』公演2016 in 奈良の平城宮跡